

シンガポールの中心部からマレーシア国境までは、30^分くらいだ。渋滞してないければ、30分から45分で到着する。シンガポール国境から橋一つ渡ると、ジョホールバルに着く。今やクアラルンプールに次ぐマレーシア第2の都市である。そのジョホールバルでは、シンガポールとの一体化を目指した大規模都市開発「イスカンダル計画」が進行している。

今回、日本人の投資家グループに交じってイスカンダル計画の現場を參觀した。ツアーのメンバーは私を含めて6人。マレーシア側に入ると、参加した女性経営者の一人は「バリ島に來たみたい」とはしゃいでいた。シンガポールの都会的な雰囲気とは全然違うリゾートの雰囲気なのである。

イスカンダル計画では、シンガポールの2倍から3倍の面積が開発対象になっている。イスカンダル地域開発庁によると、従来の産業（石油化学、電子産業）だけでなく金融、教育分野の開発が計画されている。また、シンガポールに比べて土地や建物のコストが3分の1から5分の1なので、シンガポールからの移住や世界中から投資の対象になっている。

2014年に完成するという豪華コンドミニアムの見学をしたが、既に8割が売約済みになっている。120平方メートルの3LDKコンドミニアムが1600万円から2000万円前後の価格帯で飛ぶように売れているという。

AROUND THE WORLD

山師の手帳 第13回 中村繁夫

国境を越えた共存共栄策「イスカンダル計画」



シンガポールの3LDKコンドミニアムが1億円もするのに比べると、投資対象としては割安だから、お客の中には日本人も結構いるらしい。

マレーシアへの出入国のチェックでは、車に乗ったままで手続きをしてくれるから便利である。マクドナルドのドライブスルーみたいな感じだったので助かった。

和やかにパスポートチェックをしてもらえたので「アパカバル」「テレマカセ」「サンパイジュンパラギ」と言ったらさらに愛想良く答えてもらえた。それぞれ「こんにちは」「ありがとう」「また会いましょう」という意味である。

この国境を越えるときにふっと「デジタル状態」になった。米・サンディエゴからメキシコのティファナに入った記憶がよみがえったのである。経済的に豊かな国から発展途上国に入るときには一種独特の雰囲気がある。それは経済的な落差というよりも何か人間臭さというか、その生活感に安らぎを感じるのである。過去に戻ったような郷愁にも似た癒やしを感じるのである。

線引きの意味をなくす

飛行機で入国するときと違い、陸路で国境を通過すると、荷物検査や通関手続きで、



外交的な緊張を感じる国は今でも少なくはない。例えば、中央アジアの国境では大体において時間がかかる。キルギスからウズベキスタンに入るときや、グルジアからアゼルバイジャンに入るときには緊張感が走る。ルワンダから、国連軍が常駐している内戦状態のコンゴ民主共和国への入国は世界で最も危険なケースだといえる。

国境というのは、その国の性格や政治経済状態が見えてくるから面白い。和やかな雰囲気を通してることのできるシンガポールとマレーシアの国境からは、イスカンダル計画で共存共栄を図りたいという意図が強く伝わってくる。

そもそも、国境とは、政治、経済、文化、宗教などの違いから為政者が勝手に決めて地上に線を引きただけのことだ。昔の遊牧民たちには国境の概念がなかった。インターネットで国境を越えてつながる時代になっているのに、物理的な移動を阻害する国境だけがいつまでも残るとは考えにくい。人類は、いずれ地球の上で一つの共同体になると信じているものだ。

〔なかもら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン(AMJ)社長。新著に「レアメタルハンター・中村繁夫のあなたの仕事を成功に導く「山師の兵法A to Z」(ウエッジ)。